同窓会報告

同窓会の歩み

新津工業高等学校同窓会は、学校創立後の第一回卒業生を送り出した昭和四十一年三月七日に設立され、今日まで母校の発展と会員相互の親睦を目的に活動を継続してきました。

毎年の活動は、同窓会報等でその都度紹介してきましたので、その部分は過去の資料に譲り、今回母校創立五十周年に当たり、最近十年間のことについて概略を紹介します。

平成十四年度に工業高校創立四十周年記念事業を開催したあと、新潟県下の工業高校の統廃合と学科再編が急速に進みました。我が母校も電子科、電気科が閉科となり、機械科、機械システム科が発展的に改編され、現在、工業マイスター科、生産工学科、ロボット工学科、日本建築科の四学科となりました。ここに至るまでの間、私たち卒業生は、新津工業高校がなくなるのではないかと心配した時期もありましたが、歴代学校長を始め関係者皆様のご尽力で専門性の高い学科へと新しい歩みを進めています。母校が今の時代に先進的な特徴ある工業高校として以前にもまして注目される学校へと展開していることは同窓生として誠に嬉しく思います。

この十年間、その節々に、私たち同窓会も精いっぱいの支援・協力を惜しまず歩んできました。部活動支援のためのマイクロバス寄贈、四十周年記念事業や電子科・電気科閉科の記念事業、これらには同窓会としても卒業生や旧・現職員の方々から貴い募金をいただき、実行委員会の皆様と協同し、それぞれの節目を飾ることができたと考えております。特に電子科閉科では校歌の一節「工業をもて人を益せん」と揮毫した記念碑の建立、電気科閉科では生徒海外派遣研修事業の実施があります。これらの式典には創立当時から勤務された先生方も大勢参加してくださり、新設校ならではの多くの困難を克服してこられた当時青年教師皆様の熱い思いを伺うことが出来ました。教え子である私たちもまた、当時の恩師の方々の心意気を深く受け止めることがでました。

いくつかの取り組みの中でも、特筆すべきは生徒海外派遣事業でしょう。平成十八年度、電気科閉科事業の一環として設けた基金を基に、平成十九年度、二十年度と二年間に渡り計十名の生徒を同窓生引率のもと、中国上海、韓国ソウルに派遣し国際的な視野で物作りの現場を見るという貴重な体験

学校へマイクロバスを寄贈

をしていただくことができました。

さて、同窓会組織は、卒業生の多方面での活躍を基に、職域、地域での同窓会支部が形成され、日常的には支部の皆様の活動によって会の運営が支えられています。以前より、新しい支部形成にも力を注ぎ、新設支部への支援、また支部の皆様からは日ごろの交流を深めることと共に、母校の節目ごとには多くのご協力をいただくことができたことは感謝なことでした。

また、同窓会が母校を応援するための経済的基盤を整えるため、卒業生からの同窓会費追徴を平成二十年度からスタートさせました。組織としても経済的な体力を持つ必要があるためであります。今後も卒業生の皆様からご理解をいただきながら同窓会を充実させ、母校に学ぶ後輩を支援していきたいと考えております。

平成二十二年一月には、学校後援会、ＰＴＡそして同窓会が母校創立五十周年記念事業実行員会を発足させました。新津工業高等学校半世紀の歩みを記念するものであると同時に、母校の未来へのさらなる発展を祈念する場となるものであります。

日本の経済成長時代に合わせて出発した新津工業高等学校でありますが、時代とともに変遷を辿ったことは皆様よくご存じのとおりです。社会情勢の変化の中でも「工業をもて人を益せん」とする精神が脈々と受け継がれてきているものと信じます。私たち同窓会はこれからも、母校の発展のため、後輩の活躍のため微力ではありますが支援を惜しまず歩んでまいります。

平成18年　電気科閉科式典

平成19年度(第1回)生徒海外派遣研修

―中国上海編―

この研修制度は、平成18年に行われた新津工業高等学校電気科閉科記念事業において、多くの皆様からのご寄付が「生徒海外派遣研修基金」として運営され、平成19年8月に始めて実施されたものです。

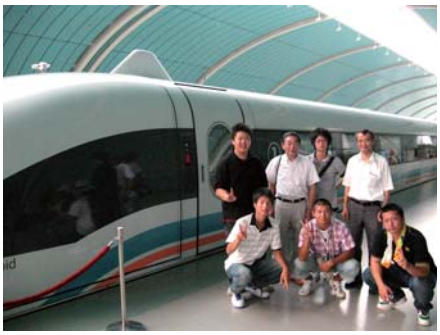
第1回目は夏休みの最終週となる8月29日から9月1日までの3泊4日の行程で、中国上海市へ出かけて来ました。

構成メンバーは機械科3年生2名、機械システム科3年生2名の研修生4名と、同窓会員を中心とした引率者5名の計9名でした。

主な視察研修内容

①「リニアモーターカー」乗車体験。

上海浦東国際空港から市内龍陽路駅までの40㎞を8分で連絡、振動もなく乗り心地の良い時速400キロのスピードを楽しみました。



リニア搭乗後　龍陽路駅で

②「上海大众工業学校」への表敬訪問。

ここは、中国国家級重点学校に指定される工業系学校で、中国各地から集まった生徒たちが3学年で5，000人。丁度訪れた時は軍事訓練の最中、国家の空軍の職業軍人が学校に出向き指導しているところで、緊張感と連帯感を養成し、努力して学ぶ気構えを植えつけさせるのだそうです。この雰囲気に研修生たちはしばらく言葉もなく、びっくりした様子でした。日本の学校教育に比べ国家のためという精神が色濃く出ている部分もありますが、一人一人の生徒の能力を高めようという強い意志が随所で感じられました。

上海大众工業学校
背後には軍事訓練中

上海徐浦標準件有限公司
旋盤の指導を受ける研修生たち

③「F1サーキット場」と「上海汽車博物館」の施設見学。

年1回のF1レースをまじかに控えたサーキット場では、数台のマシンが鋭い轟音を響かせながら目の前を疾走。また汽車博物館には、草創期から近代に至る数多くの自動車が展示されており、いずれの施設も研修生たちの好奇心を十分満足させるものでした。

上海汽車博物館
お気に入りの汽車の前で

④中国独資の工業部品製造工場「上海徐浦標準件有限公司」の視察。

「上海徐浦標準件有限公司」は創立して13年、現在社員は400人ほどの工場で、建築に使う「ネジ」や「ボルト」等を製造しています。工作機械は全体的にかなり古く、騒音、油煙、粉塵など決して良いとはいえない環境の中、従業員は防護具も着装もなしで、一生懸命働いていました。それでも

素材から一つ一つの工程を経て、大小様々なボルト類が出来上がっていく過程を、従業員の息遣いを感じるほど間近に見て回れたことは、機械を学ぶ研修生たちにも大きな収穫ではなかったでしょうか。

⑤その他見学、観光など

他にも上海の歴史的建造物や博物館など、各施設への見学ができたことや、文化・芸術に関しても大変有意義な経験になったと感じています。

参加した4人の研修生から、

「上海の工業高校のみんなはやる気があって私たちにはない高度な技術を持っていることが実際に見て分かった。日本人の工業高校生も負けられないと思いました。」

「中国雑技団を生で見て感動しました。そして勇気をもらいました。」

「高層ビルが建っている下でお金を恵んでくれといわれて、貧富の差がとても激しいんだと思いました。」

「工場の機械は古いけれど、やっていることは技術のある仕事だと感じました。」

等々，様々な感想が寄せられました。

希望を持って参加した生徒達だけでなく、同行した者も含め9人全員が、ここで感じる考え方は異なるにせよ、「世界の工場、世界の市場。中国」の実情と様々な格差を実感することができ、中国へ行ったことで日本を見直す良いチャンスにもつながり、将来何らかの形で今回の訪中体験が役立つのではないでしょうか。

《平成19年度(第1回)生徒海外派遣研修・報告書より》

工場応接室

浦東空港で通訳の朶さんと

工業学校実習センター建物

参加者氏名

〈研修生4名〉

田邉公一　3年1組（機械科）

森山貴人　3年1組（機械科）

石川直樹　3年2組（機械システム科）

佐久間和明　3年2組（機械システム科）

〈随行者5名〉

岡村茂（推進会議議長）

石黒利幸（推進会議委員）

斎藤靖（推進会議事務局長）

島倉弘（推進会議会計）

島倉基（オブザーバー（大学生））

平成20年度(第2回)生徒海外派遣研修

― 韓国ソウル市近郊編 ―

平成20年8月、「生徒海外派遣研修基金」による第2回生徒海外派遣研修が行われました。

第1回目となる中国上海市近郊に続き、第2回目は8月21日から23日までの2泊3日というスケジュールで、韓国ソウル市及び仁川市、安山市へでかけて来ました。

構成メンバーは機械科3年生5名、機械システム科3年生1名の研修生6名と、同窓会員を中心とした随行者6名の計12名でした。

主な視察研修内容

①「自由の橋」、「鳥頭山（オドゥサン）統一展望台」見学。

自由の橋はイムジン川に架かる唯一の橋で、許可なく出入りできる最後の地点。また、統一展望台からは高倍率望遠鏡でイムジン川対岸の北朝鮮の村をのぞくことができ、北朝鮮の現状を実感してきました。

②「新潟県ソウル事務所」からの説明会

宿泊ホテルへ坂井所長(新潟県より出向)と伊藤次長(新潟市より出向)をお招きし、韓国の基本的な情報や、経済・労働状況など興味深いお話をいろいろとお聞きすることができました。

新潟県ソウル事務所からの説明会

③仁川市「三友システム」企業視察。

「三友システム」は１９９６年創業、従業員20人の小規模な工場で、社長家族が中心となり外国人労働者を数多く採用しています。工場内には金型製造・プラスチック射出の機械などを設備し、キャスターの製造・卸販売や、様々なオリジナルデザインの椅子を製造しており、インターネット販売で事業拡大している企業でした。

真剣に説明を聞く研修生たち
（三友システム）

④安山市「株式会社ＭＣＴＥＣＨ」企業視察。

「株式会社ＭＣＴＥＣＨ」は２０００年創業、従業員は50人で、精密な電子回路基盤を製造する会社です。中国・瀋陽にも工場を持ち、海外の仕事も数多くこなします。日本語を話すスタッフからの説明で研修生も大変興味深く工場内を見学、質疑応答も行われました。「競争力ある商品開発を通じて顧客から信頼を受ける企業でありたい」と世界的にもトップクラスの技術を持つ元気のある企業でした。

社長（２列目センター）と一緒に
記念撮影（ＭＣＴＥＣＨ）

⑤「Ｎソウルタワー」「復元された清渓川」、「景福宮」見学、観光。

Ｎソウルタワー展望台からの素晴らしい夜景や、蘇ってきれいに整備された清渓川の散歩を楽しむことができました。また、１３９

5年に建設され国の史跡にも指定される景福宮では、憲兵の交代式や数々の文化財もさることながら、日本から観光で来たという当時の衣装を纏った2人のキュートな女性と記念撮影できたことも良いお土産になりました。

当時の衣装を着ての記念撮影（景福宮）

参加した6人の研修生から、

「企業視察を通じて、韓国独自の技術や作業工程を見てきました。韓国も日本と同じぐらいの工業技術力が発達していることを知るよい機会になりました。」

「韓国の食文化や韓国の歴史、そして韓国の工業の技術など、よく学ぶことができたので、とてもよかったと思います。」

「韓国についてみると、高層マンションが多く、道路も片側4車線の所を見て、その時初めて海外についたという実感が湧きました。」

「中でも印象的だったのが一生懸命働く日本人やアメリカ人などといった国外の方でした。私は同じ国外の人が慣れない土地で一生懸命働く方々に感動しました。」

「韓国は日本と肩を並べるくらいに発展してきました。日本も負けないように、頑張って欲しいです。」

「日本よりも戦争の影響があるというのに、町並みが変わらないということは、すさまじい努力があったからだと思います。そのことにすごさを感じました。しかし、北朝鮮との国境近くでは、まだ厳重な警備がされていました。実際、僕らの乗っているバスに戦車が横切りました。あんなに発展した国がいまだ戦争と隣り合わせな事にガッカリしました。」など、様々な感想を寄せてくれました。

希望を持って参加してくれた生徒6名には、日本以外での観光を含め工場視察など貴重な体験ができたものと感じておりますし、これが将来何らかの形で役立っていただければと思います。

《平成20年度（第2回）生徒海外派遣研修・報告書より》

専用バス内　通訳・朱さん（左女性）

参加者氏名

〈研修生6名〉

和泉　裕也　3年1組（機械科）
佐藤　大地　3年1組（機械科）
土田　哲也　3年1組（機械科）
光井　駿　3年1組（機械科）
若林　翔太　3年1組（機械科）
中林　孝之　3年2組（機械システム科）

〈随行者7名〉

岡村　茂（推進会議議長・同窓会会長）
熊倉　稔（推進会議オブザーバー・後援会会長）
高塚　則明（推進会議委員・同窓会副会長）
長谷川　貢（推進会議委員・同窓会副会長）
石黒　利幸（推進会議委員・同窓会副会長）
昆　昌喜（推進会議事務局長・同窓会書記次長）
斎藤　靖（推進会議事務局長・同窓会書記長）